

---

# 銀の勇者と金の王

柚木

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

銀の勇者と金の王

### 【Nコード】

N2764BA

### 【作者名】

柚木

### 【あらすじ】

勇者として召喚されたが女だからというだけで命を狙われているらしい。

協力者の力を借りながらお隣の国に亡命を目指しての逃亡生活。神様の加護で使えるようになった魔法で男の姿になってカモフラージュもばっちり・・・？

文章の練習用に書いてます。読みづらい部分が多いかと思えます。更新頻度もその時の気分に左右されがちです。

それでも生暖かい気持ちでお付き合いくださると嬉しいです。  
\*追記\* B1ではありません。

## はじまり

気がついた時にまず目に入ったのは見慣れない天井だった。少し痺れが残る頭を振り、意識を覚醒させ現状を確認する。

少し体に痺れはあるが動けないほどではない。服装は記憶にある通りの喪服代わりの制服。

「確か・・・お墓参りに行って・・・」

そう、私はお墓参りをしていたはずだった。

+ - + - + - + - + - + - + - + - + - + - + - +  
+ - + - + - + - + - + - + - + - + - + - + - +

物心ついた頃に両親が事故で他界してしまい、私と兄は母方の祖母に育てられた。

両親がいないことは寂しかったが、祖母の愛情に包まれて十分幸せな日々を送っていた。

しかしそんな些細な幸せも長くは続かなかつた。それは私が十歳になってすぐの事。

ある日、忽然と兄が消えた。

祖母が捜索願を出し、自身も必死で兄の行方を探していた。しかし兄は見つからなかった。

行方不明になる直前の足取りさえもわからなかった。もちろん私も探したが、やはり兄は見つからなかった。

それから色々であった。

嬉しいことも、悲しいことも。

それらを全部、祖母と差さえあつて生きてきた。

兄がいなくなつて七年。

兄の失踪宣言が成立して正式に兄の死亡が認められた。

本当は生きていて欲しい。

でも今のままじゃ前に進めない。

兄を見つけることは諦めていないけれど、それをひとつの区切りとして受け入れた。

「これから新しいスタートだね」と言うと、祖母も少し悲しそうに微笑んだ。

その日の夜、静かに祖母は泣いていた。

それから数日後、祖母が倒れた。

今までずいぶん無理をしてきた祖母。その無理がたたつたのだろう。あつという間に祖母は両親の元へと旅立ってしまった。

「翡翠のこと諦めないでね」

最後にそうやさしく微笑んで。

祖母が旅立ってからとはにかく泣いて、泣きはらして、やっと落ち着いた頃にお墓参りに行く決心をした。

小高い海に面した丘にお墓はある。  
季節は春。日差しが心地よい日だった。

きれいにお墓の手入れをして、ふ々と空を仰ぐ。

春とはいえお墓の手入れは重労働で、うっすらと汗が滲んでいた。

ざああっ

心地よい風が吹き抜けた。

海に面したこの場所は風の通り道になっている。

風がない穏やかな日だったけれど、この場所は例外なのだ。

ふと違和感を感じて視線をあげると、太陽がその輝きを増したように見えた。

そして次の瞬間、ありえない突風に襲われた。

地面から足が離れる浮遊感。

白く霞む視界。

ずきずきと激しく頭が痛む。

わけがわからなくて、痛みで思考も麻痺してきて。

ふと人の声が聞こえた気がしたけれど、その言葉を理解することもできなかった。

理解しようという気すら起こらないほど思考は麻痺していた。

## 召喚された少女

そして今のこの状況に至る。

周りを見回してみても見覚えがない場所だ。

それどころかなんだか高そうなアンティーク調の家具が並んでいた。

あの突風に飛ばされて気を失ったところを通りかかった裕福な人にも助けられたといったところだろうか。

落ち着かないし早めに家主にお礼をいって失礼しようかと思案していると、コンコンと控えめなノックの音がした。

「お目覚めですか？」

「あ、はいっ」

「では少々失礼してもよろしいですか？」

「もちろんですっ」

とっさのことで思わず声が上がったがそれが仕方のないぐらいの美声だ。

慌てて佇まいを正して声の主が入ってくるのを待つ。

「ご気分はいかがですか？」

ゆっくりと静かに部屋に入ってきたのは、流れるような蒼の髪が印象的な青年だった。

しかしいわゆる美形と呼ばれる人種である青年は、白いローブとい

う奇妙な服装だ。

そもそも髪が蒼という時点で奇妙すぎる。

いくら日本人の顔のつくりとはかけ離れた外人さんだからといって天然で蒼い髪というのは聞いたことがない。

これはちよつとオタクな友人が言っていたコスプレ趣味の残念な美形というやつだろうか。

それはさておき、助けてくれたことに間違いはないだろう。

「えっと、ちよつと痺れたような感覚はありますが大丈夫です。助けていただいてありがとうございます」

私がそう言うと、彼は髪と同じ蒼の瞳を細めて微笑んだ。すべてを見透かされているような気分させる、そんな瞳だった。

「少しだけ失礼しますね」

彼はそう言って私の右手をとる。

かあつと顔に熱が集まるのがわかった。

しかしそれも次の瞬間消えてなくなつたのだが。

私の手に重ねた彼の手を中心に、淡い光が溢れた。

私はその光景をただ呆然と眺めるしかできなかつた。

「いかがですか？」

そうやって彼が手を離して、やっと正気に引き戻された。

彼の言葉の意味が分からずに首を傾げれば、さっきまで動かすたびに感じた痺れが消えていた。

「・・・痺れが消えました」



「それはよかった」

「ありがとうございます」

未知の出来事に驚きを隠せずに、それでも不思議と怖いと感じることはなくお礼を伝える。

そして少しずつ、感じる違和感が大きくなっていく。

手から光が生まれて体の痺れが消える。

そんな治療方法を私は知らない。

チラチラと頭を過ぎるのは少々オタクな友人と付き合いで一緒にプレイしたゲーム。

剣や魔法が出てくるファンタジーものだ。

つうと背中を冷たいものが伝う。

目の前の青年も残念な格好の美形な外人さんなどではなく、これが普通なのだとしたら？

残念なのは私の頭のほうではないだろうか。

「申し訳ありません。すべてはこちらが悪いのです」

そう言っつて青年は膝をつき、頭をさげた。

何だか嫌な予感しかしない。

ぎゅ、と手に力を入れて私は彼の言葉を待つ。

「すでにお気づきかもしれませんが、ここは貴方のいらした世界ではありません。いわゆる異世界という場所にあるアルメイサンとい

う名の国です」

膝をつき、頭を下げたままの彼が苦しそうに告げる。表情は見えないが、その言葉に嘘は感じられない。

「……………」

そんなことすぐに信じられるわけもない。でもそれが彼の狂言だと断言できないのも事実。

「あの、さっきの光は……………」

「あれはリヒトの加護による治癒魔法です」

「魔法ですか…………私のいた場所には魔法なんてありませんでした」魔法なんて、私の暮らしていた世界にはなかった。

でも現にその魔法を目の当たりにして、その効果も実感してしまっ

た。あれは手の込んだ手品でこれがドッキリだといえないこともないが、そもそも私にこんな大掛かりなドッキリを仕掛けて誰にメリットがあるというのか。

「そうですね…………この世界でも魔法が使える人間は少数です。それについては後ほどご説明しましょう」

「はい」

「それでは遅くなりましたが…………。私はこの国の神官長を務めているアルファルドと申します。アルとお呼びください」

「私は葉山瑠璃といいます。瑠璃、が名前です。よろしく願います、アルさん」

慌てて名乗り、ベッドに座ったままだったがペコリと頭を下げる。するとアルさんは少し困ったように笑う。

「私のことはアル、と。貴方は勇者様なのですから」

「は……?」

ユウシャ……?

今アルさんは勇者と言った気がしたがきつと聞き間違いだろう。

私が勇者だなんてありえない。

ちよつとオタクの友人に見せてもらった本にこんな設定の話のものがあつたが、それはすべて作り物であり娯楽用。

実際に自分がその立場にならないから楽しめるのだ。

それでもあの友人なら自分の身に降りかかったとしても、小躍りして喜んだりするのだろうか。

## 理不尽な理由

「何かの間違いでは？」

「貴方が勇者であることは間違いありません。我々が信仰するリヒトによってこの世界に召喚されたのですから」

一応間違いがないか確認してみがやはりきっぱりと否定されてしまった。

ゆるりと首を振って否定するアルさんの顔は、とても悲しそうだった。

ああ彼は本当のことを言っている、まだ彼のことを完全に信用したわけではないのにそう確信する。

何故だかわからないけど、すべてが嘘偽りのない本当のことなんだと。

「しかし、貴方はリヒトだけでなくモンドの加護も厚いようです」

「あの、そのリヒトとモンドというのは？」

「説明不足で申し訳ありません。リヒトは我々の信仰する光の神であり、モンドはリヒトの眷属にあたる月の神です。その髪の色がモンドの加護を受けている証でもあります」

「髪の色、ですか？」

言われてそれなりに長く伸ばしている髪を人房つまむ。

「え……何コレ……」

一度も染めたことのない私の黒髪は、見事な銀髪になっていた。引っ張ってみても抜けることはなく髪を引っ張られた痛みもあり、やはり自分の髪に間違いはない。

「私の髪は黒でこんな色じゃ・・・」

「黒、ですか？確信はありませんが、恐らくこの世界に召喚された際にモンドの加護を厚く受けて変化したのだと思います」

ただただ呆然とするしかできなかつた。

そしてアルさんがそんな私にトドメをさすような一言を告げる。

「貴方は勇者様で神に遣わされた尊いお方です。しかしアルメイサン王は貴方を亡き者にしようとしています」

「な、ぜ・・・ですか？」

「貴方が女性だからです」

意味がわからない。

突然勇者で神に召喚されてこの世界にきただとか、神様の加護とやらで髪が銀髪になったとか。

おまけに尊い存在だというのに王様に命を狙われている？しかもそれが私が女だからという理由だけで。

突拍子もないことで、言葉も出ない。

「過去の勇者様が男だったというだけで女性の勇者はありあえないと短絡的とらえるような愚かな王なのです」

青の瞳は悲しそうに伏せられて、「申し訳ありません」と呟く彼になんと言えればいいのかわからなかった。

好きでここにいるわけではないのに。

望んで勇者といわれる存在になつたわけではないのに。

まだ兄を見つけれられていないのに。

それはあまりにも理不尽で悔しくて、そして恐ろしくて。ぼたりと涙がこぼれた。

「私は貴方をあの愚王の好きにさせるつもりはありません。しかし今の私にあの愚王を止めることができないのも事実です」

そう言ったアルさんの声は先ほどまでの穏やかな声とは違う、意思の強そうなものだった。

「ちょうど今日は満月でモンドの加護の強い日でもあります。ここから逃げるには都合のよい日です」

「逃げる……？」

その言葉に顔を上げれば、アルさんはくっくと口角を上げて手を差し出す。

「貴方は私にとってもこの国にとっても大切な方。時期が来るまであの愚王の手の届かない隣国に身を隠したほうが安全でしょう」

その言葉にどきりとした。

信仰するリヒトに召喚された勇者だからということなのだろうか、  
『私にとって大切な人』といわれれば誰だってどきりとするんじゃないだろうか。

ましてやアルさんは私には免疫のない美形なのだ。

それをごまかすように慌てて言葉を返す。

「隣国、ですか？」

「はい、アルメイサンの隣にはモンドの信仰が盛んなアルデバランという国があります。以前は荒れていましたが今はとても治安もよく、モンドの加護の厚い貴方が身を寄せるには最適の国でしょう」

時期というのがいつなのか、どういう状態の時なのかは分からない。でも私にこの国の知識など全くなく、生活する術もない。結局アルさんの言葉に従う以外に道などないのだけれど。

ふう、とため息が零れる。

「モンド・・・月の神様なんですよね」

ゆっくりとベッドから降りて立ち上がり、月光の差し込む窓辺に立つ。

窓から見上げた月はもといいた世界と同じようで、でも比べ物にならないほど美しかった。

「つつ！」

違和感を感じて息が詰まる。  
頭に凄まじい勢いで何かが流れていく。

「ルリ様！？」

そんな私をみてアルさんが慌ててこちらに駆け寄る。  
違和感はすぐに消え、私はアルさんに振り返ってにっこりと笑う。

「大丈夫です。ただ月の女神様が、少し魔法の使い方を見せてくれたみたいですよ」

「モンドが・・・？」

「はい、たとえばこんな風に」

先ほど一気に頭に流れ込んできた知識。  
それを思い浮かべながらすっと右手を自分に翳す。

光に包まれ、そして体が変化する違和感。

「ルリさ・・・ま・・・？」

アルさんが驚きを隠さずに、私をみて呆然としたように名前を呼ぶ。  
私はそんなアルさんの反応をみて頷く。  
辺りに鏡もなく窓は磨りガラスで自分の姿を確認できていないが、  
ちゃんと魔法は使え、成功したらしい。



少しだけ高くなった目線に違和感を感じるけれど、ヒールを履いていると思えばその程度でしかない。

体には多少違和感を感じるけれどそれもじきに慣れるだろう。

「どうです？これなら見つからないと思いませんか？」

にっこりと笑ってそういう私は、完全に男の姿になっていた。

ちなみに服装は制服のままだったが、女子の制服ではなく男子の制服へと変化していた。

さすがにスカートだと変態っぽいのでそれはよかったと思う。

でも男子の制服ということは服装は私のイメージから変化したということだろう。

どうやらこの魔法は使用者のイメージに強く影響を受けることに間違いないようで、頭に浮かんだ魔法の知識は間違っていないようだ。

## 旅の同行者

「魔法なんて空想の世界のものだとばかり思っていました」

「貴方はリヒトとモンドの加護を受けるお方ですから魔法は使えるだろうとは思っていましたが・・・まさかそんな・・・」

「男になるなんて？」

アルさんの言葉に自嘲の笑みがこぼれる。

幼いころ魔法が使えたらどんなにすばらしいだろうと憧れたこともある。

正義のヒーローみたいに悪者をやっつけたり、シンデレラのように魔法でお姫様に変身するとか。

まさか本当に自分に魔法が仕えるようになって、最初に使う魔法が『男になる魔法』だとは思いつかなかったけれど。

「女神様はかなり私に過保護なようです」

「確かに、モンドは月の女神だといわれていますが・・・まだそれはお伝えしていないのに何故それを？」

「今月の光を浴びたときに、一気に魔法の知識が頭に流れ込んできました。そして綺麗な女の人の姿も」

一度流れ込んできた知識は到底すぐ覚えられるようなものではなかったのだが、使いたい魔法を思えばその魔法が頭に浮かぶという感じでチート感満載だ。

ただそれはモンドに関する魔法のみで、残念ながらリヒトに関する魔法の知識は皆無らしい。命がかかっているというのになんとも中途半端なチートだが。

私の言葉を聴いてアルさんは目を伏せ、静かに息をつく。

そして視線を私に戻したアルさんの目には強い意志の色がみえた。魔法で男の姿になってるとはいえ中身は元の女子高生なままな私が盛大にときめいてしまっても仕方ないことだろう。

アルさんは周りの友人たちが騒いでいたアイドルが比喩物にならないほどの美形で、その意思の強そうな瞳で見つめられているのだから。

「その姿は身を隠すには都合がよいですね。とても可愛らしかったので少々残念な気もしますが」

「へっ？」

アルさんの言葉に顔に熱が集まるのが分かる。

きっと彼は特別な意味で言ったのではないだろうが、こちらは美形にもそんな言葉にも免疫がないのだ。

真っ赤になっているであろう私をみて、再び先ほどまでと同じ優しい笑みを浮かべるアルさん。

今私は男になっているのだからちょっと引かれているんじゃないかと心配にもなる。

その時コンコンと扉がノックされ、アルさんがちらりと扉を一瞥してからこちらに向き直った。

「こちらの世界に来たばかりの貴方を一人で送り出すわけにもいかないのです、貴方の意見も聞かずこちらで勝手に同行者を決めてしま

いました」

「あ、いえ。そのほうがありがたいです」

「シヤムス、入ってください」

アルさんが再び扉を振り返り声をかけると、「失礼します」と控えめな声が聞こえて一人の青年が部屋へと入ってきた。

「彼はシヤムス。貴方の護衛を兼ねた同行者です」

「シヤムスと申します。どうぞよろしくお願い致します、勇者様」

シヤムスと名乗った青年は、アルさんとは別のタイプの美形だった。柔らかそうな金の髪にすしきつめの紫の瞳。

アルさんが綺麗といわれるタイプの美形ならシヤムスさんは格好良いいといわれるタイプの美形だ。

こんな美形と一緒に過ごすのは落ち着かなくて、心臓に悪そうな気すらする。

まあ今の自分は男なのだから毎回赤くなったりしていたらさぞ気持ち悪がられるだろうが。

「シヤムス、こちらはル「ラピスです。よろしく申し上げます」  
「は？」

アルさんの声を遮って名乗る。

思いつきり偽名だが、(そんなに良くはない頭でだが)ちゃんと考えてのことだ。

「私のもとの世界の名前では目立ちそうなので・・・この名前のほ

うが違和感が少ないかと思ったのですが」

「確かに……そちらの名前の響きのほうがこちらの世界の名前には近いですが……」

「隠れるには少しでも目立つ要素を減らしたいのです。この髪だけでかなり目立つきもしますけどね」

髪を指にくるりと巻きつけ、男の姿になり髪が短くなっていることに気づき苦笑がもれる。

髪も私のイメージに添うように短く変化したらしい。

そんな私たちのやり取りを、シャムスさんはただ静かに眺めていた。よく友人に「瑠璃の話し方は女の子っぽくないよね」と言われていたのだが、それがこんなふうな役にたつ時がくるなんて人生何があるかわからない。

一緒に暮らしていたのが祖母だったからか、口調は大人びているとよく言われたし周りの大人の顔色を伺うことも多かった為、周りの子達と口調が違うのは自覚している。

友人が私の口調を矯正しようとした事があつたが、「ごめん私が悪かった」と何故か誤られた。

「アル、神殿の外に人の気配がある。急いだほうがいい」

ふとシャムスさんが顔を窓の外へ向けてそう告げた。

びくり、と体が震える。

「ラピス様、思っていた以上に時間がないようです。シャムス、ラピス様を頼みます」

「ああ、わかっている。ラピス様、こちらへ」

「はい、シャムスさん」

シャムスさんに促され、アルさんに背中を押される形で部屋をでる。出た所でシャムスさんが振り返る。

「今後は旅の連れということで、お互いに敬語などは一切なしでお願い致します。申し訳ありませんが、銀髪はこの国では目立ちますので」

「わかりました・・・いや、わかった」

シャムス、の言葉に頷く。

そんな私を見てシャムスはふつと微笑む。

「私は正面にいるお客様の出迎えに行かなくてはいけませんのでここでお別れですね」

「アルさ・・・いやアル、ありがとう」

「・・・ラピス、俺達は別の場所から出るぞ」

私の言葉にアルはふわりと微笑んで、すつと背筋を伸ばして歩き出す。

その背中を見送り、シャムスに連れられアルとは反対方向にある別の小さな部屋へ入った。

部屋に明かりはなく、しかし部屋の中心にある台座に置かれた水晶のような石がかすかな光を放っていた。

それはとても幻想的な光で思わず見とれてしまう。

「アルが用意した転移用の宝珠だ。急ごう」

シヤムスに手を引かれ台座の前に移動する。

男になって手も多少大きくなっていたが、シヤムスの手はそれより大きくて逞しかった。

繋がれている手とは反対の自分の手をみる。

男になったとはいってもこんな手で身が守れるんだろうかと不安になった。

「いくぞ」

その声に慌てて顔を向ければ、シヤムスが宝珠に触れすつと目を細めた。

何か暖かいものが緩やかに流れてシヤムスの手に集まっていく感覚。これはシヤムスの魔力の流れなんだと判る。

その魔力に反応して宝珠の輝きが増し、そして部屋に光が溢れた。

+ - + - + - + - + - + - + - + - + - + - + - +  
+ - + - + - + - + - + - + - + - + - + - + - +

光が収まって目を開くと、そこは木々に囲まれた場所だった。

「近くに街がある。今日はそこで宿を取ろう」

「わかった」

シャムスが辺りを警戒しつつ歩き出す。  
遅れないように少し急いで足を踏み出した。

「う……気持ち悪……」

突如ぐらりと視界が歪み、体が傾くのがわかったがどうすることもできない。

しかしすぐにシャムスが支えてくれたので、地面と抱き合うようなことにはならずすんだ。

シャムスがじつとこちらを覗き込むのを気配で感じる。

「魔力酔いだな」

魔力酔い？なにそれ……と聞きたいが話すのも辛い。

「魔力に触れたことがない者や耐性のない者などがなるんだが……  
そうか、お前魔力は高いが異世界の人間だったな。魔力に触れたことがなかったのなら仕方がない。じきに治まるからそれまで辛抱してくれ」

そう言つてシャムスは少しだけ身を屈めて、私を担ぎ上げた。

それはいわゆる『俵担ぎ』だった。

いや、決してお姫様抱っこして欲しかったわけではないのだけれど。  
ただ、この担がれ方は……胃が圧迫されて余計に気持ちが悪い。

「つつ、悪い」

相当顔色が悪かったのか、すぐに気づいてもらえて背中に負ぶってもらった形となった。



さすがに見た目だけとはいえ男同士なのでお姫様抱っこは回避されたようだ。

結局近くにあるという街までずっとシャムスに負ぶって連れて行ってもらった。

最初から文字通りおんぶに抱っこで申し訳なさをきる。

## 怖い夢

街に到着したのは深夜だったがファンタジーの世界らしく冒険者というものが存在し、深夜でも宿を求める客が来るといのは良くある事らしくすんなりと宿に入ることができた。

深夜だが街の中にはポツポツと人通りがあった。

まだ気持ち悪さは残っていたが動けないほどではなかったので、シヤムスの背中から街の様子を眺めていたところ、冒険者をチラホラと見かけたのだ。

いかにもゲームの世界の住人というような格好をした・・・剣や杖などをもった人達を見かけた。

シヤムスも帯剣していたのだが美形すぎてあまり実感が沸かなかったのもある。

思わず興奮気味に反応してしまったのは仕方ないことだと思う。

少し前までは空想の存在でしかなかった人やものが目の前に存在しているのだから。

そしてアルやシヤムスのような美形ばかりの世界でないこともわかって少しほっとした。

美形しかない世界なら私のような凡人はさぞかし悪目立ちしてしまうだろうと。

これならば髪を隠すだけで、私は人の森の中に溶け込んでしまえそうだ。

宿の部屋へと入るとシヤムスは一通り部屋を確認するように見回してから私をベッドへと降ろし、さらに持っていた荷物を降ろした。それなりに重そうな荷物にさらに私という荷物まで担がせてしまっ

て本当に申し訳ない。

「ありがとうシャムス。迷惑かけてごめん」

「いや、元の世界に魔法が無い勇者が最初に魔法に触れたときに魔力酔いを起こしたという話は聞いたことがある。それを考慮に入らずにいたこちらの不注意で辛い思いをさせてすまなかった」

感謝と謝罪の言葉を告げれば、逆にこっちが誤られてしまう。

やはりその言葉に嘘はないんだと感じる。どうやらこれもモンドの加護の力らしい。

ああこれは本当なんだ、と不思議とそう感じるのだ。

それからモソモソと外套をはずし、ベッドサイドにあつた椅子の背にかける。

同じように外套を外して軽装となったシャムスが荷物から服を一式取り出した。

「とりあえずはこの服を着て、明日ラピスの服を買いに行こう。今のままでは目立ちすぎるしかといって俺の服ではサイズが合わない」

「うん、そうだね・・・」

男の姿となつて多少身長は伸びているが違和感の少ない程度で恐らく男としては背が低いだらうと思う。

それに比べてシャムスは私より十センチ以上は背が高い。

服を広げてあててみても、やはり腕も足もしっかり余ってしまうサイズだった。

「今日はもう休め。シャワーも浴びられるようなら浴びておくとい

い。明日以降は状況次第で野宿になることもある」

「ん、そうだね」

野宿・・・さすがにその経験は無い。

しかもここは異世界で、今の自分は命を狙われている状況で。

冒険者がいるのだからゲームの世界のようにモンスターがいると思っただろうがいいだろう。

怖い。

その不安を誤魔化すようにシャワーを浴びた。

流れ落ちるお湯と一緒に不安も少しずつ流れていくように。

シャワーがお湯であることに感動しつつ。

「ラピス、タオルを渡すのを忘れていた」

がちやり、扉を開きシャムスが顔を覗かせた。

シャワーだけが設置されたこの場所に脱衣所などというものは無く、扉の上のほうに籠が置いてあるだけのものだ。

恐らく風呂やシャワーは日本でいえばいわゆる大浴場のような場所で済ませるのが普通で各部屋についているのは簡易的なもの、しかもそれでも多少いい宿でなければ設備されていないようなそんな雰囲気だ。

「う、うきゃあああ!？」

変な声がでた。

「ラピス!？」

「と、とりあえずタオル置いて外出て！」

「え？ああ・・・」

見られた、みられた、ミラレタ。

扉に背を向けていたからお尻ぐらいしか見られていないだろうけど見られたものは見られた。

ぐるぐると取り留めない思考が頭を駆け巡る。

少し落ち着こうと深呼吸をして視線が下を向いたときにソレを目にした。

「つつ！」

本来ならあるはずの無いものがそこにはあった。

落ち着いて考えれば今の私は男なのだからあって当然ですぐわかりそうなことなのだが、その時はいろいろなことが一度にありすぎてすっかり忘れていたといえなかつたか。

生まれて初めて目撃してしまったソレにさらに思考は混乱し、ふらふらとよろめいた拍子に壁にごつんと頭をぶつけてしまった。

「・・・痛い」

情けないにもほどがある、と他人事のように考えながら意識を手放した。

目が覚めたら全部夢だったりするのだろうか。

ふわふわとおぼつかない足元が今は心地よかつた。

きっとこれは夢。

異世界に召喚されたり男になったりというのも怖い夢だったのだらう。

今はちゃんといつも通り女で髪だって黒い。

ふと見れば目の前にはやっぱり現実離れた美しい女性が立っているが、これは夢なのだから何でもありだろうとふらふら近づいてみる。

「こんにちは」

へらり、と笑って声をかけると美人さんもにっこりと笑う。

無性に嬉しくなってさらに頬が緩んだ。美人さんの言葉を聞くまでは。

「さっき教えるのを忘れていたことがあるの」

「さっき？」

前に会ったことがあっただろか、と思い返してみるが思い当たることもなく首を傾げる。

「私の加護は新月の時はとても弱くなってしまうの。魔法もほとんど使えなくなるから気をつけてね」

「え・・・？」

「でも貴方にはリヒトの加護もあるし大丈夫。リヒトの加護はどこにでも届くから」

一応伝えておきたかったの、と美人さんは微笑んで景色に溶けるように消えてしまった。

リヒト、と彼女は言っていた。

ずっと血の気が引くのがわかった。

気がつけば髪も銀色で体も男の人のそれだ。

あの怖い夢は夢じゃない？

それともこれを含めたすべてが夢？

再び思考の渦に飲まれながらも、モンドはやっぱり美人さんだったな、と考えている呑気な自分もいた。

**自責と決意（前書き）**

今回はシャムス目線です。



## 自責と決意

side シヤムス

ラピスをシャワールームへと送り出した俺は、小さく息をつく。

ここまでは順調。

ラピスが魔力酔いを起こしたのは想定外だったがたいした問題でもない。

あの目立つ服装は明日目立たないものを買えば問題ないだろう。

今のところ追っ手の姿は見えないが油断はできない。

ラピスだけでなく、俺もあの愚王に追われているのだから。

ふと部屋の隅の籠にタオルが置かれたままであることに気づく。

そこでラピスにタオルを渡し忘れたことに気づき、脱衣所も無いのでしかたなく直接タオルを渡そうと特に気にすることなくシャワールームの扉を少し開け声をかけた。

何故だか慌てた様子のラピスに外に出るように言われたために、タオルを持ったまま扉の外で壁に寄りかかりラピスを待つ。

しかしその直後に何かをぶつけたような音が中から聞こえた。

「ラピス、どうした!？」

慌てて声をかけるが返事は無い。

ラピス以外の人の気配もなく魔力も感じないので襲撃はないだろうと思っていた。

俺に気配も気づかれないほどの使い手の追っ手が来たということだ  
ってありうる。

舌打ちし、シャワールームに飛び込んだ。

目に入ったのは壁に頭を打ち付けてずるずると崩れ落ちるラピス。  
やはりラピス以外の気配も魔力もなく、どうやら自分で頭をぶつけ  
ただけのようだった。

しかし今更になって気づく。

さっきまで魔力酔いであれだけぐったりしていたのだ。

また気分が悪くなったのかもしれない。

急いで手にしていたタオルでラピスを包み、抱き上げベッドへと運  
ぶ。

途中でも思ったことだが、ラピスは線が細いがその見た目以上に軽  
い。

こんな状態で無事アルデバランまでたどり着けるのかと心配になる  
が、彼を無事に送り届けることが自分の使命なのだと己を叱咤する。

とりあえずいつまでもタオルで包んだままでは風邪を引いてしまっ  
たろうと、先ほどラピスに手渡した服を着せようと抱き起こす。

「・・・・・・・・」

ちょうどそこで気がついたラピスと目が合った。

「気づいたか」

「う、きゅおおおお！？」

ラピスは再び奇妙な悲鳴を上げ俺の手から逃れ、布団を頭からすっ

ぼりと被り隠れてしまった。  
なんなのだろう、この反応は。

「ラピス？」

少し訝しげに声をかければ、ラピスははっとした様子で布団から顔だけだしてこちらを見た。

「ごめん、その、あまり人に裸を見られるのは慣れていなくて」

「同性でもか？」

「あー、うん」

少し間があったように感じられるが、同性同士でも信仰する神の教えからあまり肌を見せ合わないようにするという人々がいると聞いたこともある。

恐らくラピスもそういった類のものなのだろう。

そもそもラピスは異世界の人間だというのだから、俺が想像もつかないような習慣があっても不思議ではない。

「考慮が足りず、悪かった」

謝罪し、頭を下げれば慌てたようなラピスの声。

「違うんだ、シラムスは悪くない。むしろ私を助けてくれて感謝してる。・・・服着るから少し向こうを向いていてくれるかな」

こちらに身の乗り出すような姿勢になり再び布団から上半身がでてしまう形となったラピスは、がっくりと肩を落とし頂垂れた。

今回は悲鳴は上げられなかったがなにやら落ち込んだような様子で、やはり俺に肌を見られたせいなのだろうなと思う。次からはできるだけ気をつけるようにしよう。

「ごめん、もういいよ」

声をかけられ向き直れば、俺の服を着て申し訳なさそうにこちらを見て立っているラピス。

手足を折り曲げてなんとか動きやすくしているが、やはり服が大きすぎて服に着られている感が否めない。

それにしても男だというのに庇護欲がそそられるのは何故なのか。

一見女かと思紛う様な外見であるが、先ほど男だと痛感した。

ラピスのあの様子では見てしまったとは決して言えないが。

「色々あって疲れているだろう、今日はもう休んだほうがいい」

「・・・そうだね」

俺の言葉に頷くラピスの瞳に寂しそうな色が浮かぶ。

しかしその色もすぐに隠れ、ラピスはベッドに横になりすぐに寝息を立て始めた。

やはりかなり疲れていたようだ。無理もない。

ラピスは傷一つ無いきれいな体をしていた。手も剣など握ったことのない手だった。

それはつまり戦う必要のない場所にいたということ。

今まで命の危険を感じるようなことはない生活を送っていたのだろう。

俺も明日に備えて横になる。

警戒は怠るつもりはないが、休めるときに休む事は重要なのだ。

しばらくして、人の気配で目が覚めた。

起き上がることはせず視線だけで確認すると、月明かりの差し込む窓辺でラピスが月を見上げていた。

こちらに背中を向けているのでその表情はわからないが、きっとあの寂しそうな目をしているのだろう。

チクリ、と心が痛む。そんな表情をさせているのは俺やこの国なのだから。

この世界に召喚されてしまった原因は間違いなくこの国アルメイサんだ。

本来ならば俺やアル、そしてこの国の人間がやらねばならなかったこと。

しかしすでにこの世界の人間では手が打てないとリヒトが判断したからこそラピスが召喚されたのだ。

それが意味することを俺は知っている。

だからラピスにはとても申し訳ないと思うのだ。

そう遠くないうちにラピスはそのことに気づくだろう。

できる限りラピスの力になろう。

それがこの国の、俺の責任でもあるのだから。

しばらくしてラピスも落ち着いたのか、床に戻り再び眠りについたようだ。

それを確認してから俺もまた眠りについた。

## 勇者の葛藤

目を開けば至近距離にあるシャムスの顔。

モンドの次はシャムスの幻が見える。

こんな至近距離でシャムスの顔を観察するチャンスなんてほとんどないだろうから、せっかくなのでこの機会にしっかりと観察してみる。

長い睫毛にすらりと通った鼻筋。

意志の強そうな瞳がまっすぐこちらを見つめている。

本当に、ため息の出るほどの美形さんだ。

あまり近くで見すぎると目が溶けてしまいそうなほどの眼福。

・・・どうやら見つめすぎて私の脳のほうが溶けてきているらしい。

「……………」

シャムスと目が合う。

「気づいたか」

「う、きゅおおおおお!？」

シャムスの幻が口を開いた。

ちらり、と視線を下に向ければタオルで包まれて入るが裸の自分。思わず奇声を発した後退り、布団を頭から被り自分に落ち着けと言い聞かせる。

何がどうなっている？

そういえばシャワーを浴びていて諸事情により気を失った気がする。シャムスは倒れた私をここまで運んできてくれただけだろう。

シャワールームで遠のいていった意識は比較的早く戻ってきたようだ。

しかし色々と失ったものは大きい。

それでも今は男なのだからまだマシだと思えばいいだろう。

では自分の行動は？

まじまじと見つめてしまった気はするがおさわりなどはしていないはずだ。

大丈夫、一線は越えていない。変態という一線は。

「ラピス？」

困惑したようなシャムスの声。

シャムスは護衛対象でしかも同性の私を助けてくれたに過ぎない。慌てて布団から頭だけ出してシャムスを見る。

「ごめん、その、あまり人に裸を見られるのは慣れていなくて」

「同性でもか？」

その質問でシャムスは私が本当は女だということを知らないのだと確信する。

（男としての）裸を見られてしまった以上、今更本当は女だとは言えない。

色々と恥ずかしすぎる。それはもう色々。

「あー、うん」

自分を助けてくれている相手に嘘をつくのは良心が痛むけれど、それよりも恥ずかしさが勝った。

その後は何故かと理由も尋ねられることもなく、シャムスに謝罪されてしまった。

そして早く休んだほうがいいと言われ、素直にそれに従った。

シャムスの言うとおり、色々と疲れていたから。

主に精神的に、そのほとんどが自滅とも言つべき事態によって。

こういう時は寝るに限る。

悩んでも答えが出ることのほうが少ないと、祖母がよく言っていた。悩むぐらいなら行動したほうが何倍も有意義だ、と。

横になれば不思議とあっさり睡魔に襲われ眠りに落ちた。

思った以上に疲れていたらしい。

異世界にきたり、勇者といわれたり、実感はないけれど命が狙われているといわれたり。

『起きてー』

初めて魔法を見たり、一つだけだけ魔法を使ったり性別が変わってしまったり、魔力酔いになったり。

『おーきーてー』



見たこともないような美形を二人も見られたけれど、その一人であるシャムスに色々見られたり。

『起きてっば〜』

五月蠅い。

頭に響く声は次第に大きくなって無視できなくなっていた。諦めてベッドから置きだして窓辺へ向かう。

『さつきはルリがすぐに起きちゃってきちんと伝えられなかったから、今こうして声を飛ばしているのにい』

なんだか間延びした話し方だが、これが本来のモンドの話し方のようだ。

『もうすぐ新月の夜が来るから・・・新月の夜は気をつけてね？リヒトの加護はいつも通りでも私の加護はほとんど力を発揮できないのよねえ』

どうして？

そう思い浮かべればモンドにもそれは伝わったようで。

『私はリヒトの光を使って加護を与えているからなのよ。細かく言うとな新月でなくてその前日の朔が一番力が届かないわねえ』

光を媒体にしてる、ということだろうか。

だとしたら曇りや雨などで月の光が届かない日は・・・

『モチロン力は弱まるわあ。それはリヒトも一緒、ただ程度が違うけれど。逆に満月で天気の良い日なら私の力が一番強く影響する

のよお』

要約すると、月が見えない夜は加護の力が落ちるってことだろうか。

『そう思ってもらって問題ないわ。ちなみに次の朔は六日後だから気をつけてねえ?』

そう言われても、実際どういう変化が起きるのかわからないし、ど  
う気をつければいいのかもわからない。

加護が弱くなるということは、魔法も弱くなるということなのだろ  
うけれど。

『朔と新月の日は魔法が全く使えないと思ったほうがいいわね。  
つまり今使っているその魔法も・・・』

それはマズイ。シャムスに女だとばれてしまう。

私の精神衛生上非常にマズイ。

それまでに何か対策を練っておくべきだろう。

わざわざそれを知らせてくれるなんてやっぱりモンドは過保護だと思えば『ふふふ、じゃあまたね』と楽しそうに笑い、それきりモンドの声は途絶えてしまった。

しかしこの電波でやり取りするような会話は傍から見たら相当怪しいだろう。

思わず声を出して答えないように気をつけないと。

ちらりとシャムスに視線を向ければ、やっぱり寝顔も美人さんで、私は涎を垂らした間抜けな寝顔なのにと少し悲しくなった。

## 買い物と心の栄養

朝になった。

差し込む朝日が心地よい。

夢才子というものを期待してペタリと胸に触れてみるが、それなりにあったはずの胸は真っ平らで朝から軽くショックを受けた。

「おはよう」

「おはよう、シャムス」

挨拶を返す私にタオルが差し出される。

条件反射で手で口元を拭う。大丈夫、涎が垂れていたわけではないようだ。

「顔を洗ったら朝食にして、その後服を買いに行こう」

「わかった」

タオルを受け取って洗面台へと向かう。

タオルを置く場所が見当たらないのでタオルを首にかけて洗面台の蛇口を捻る。

水は冷たくて心地よく、バシャバシャと浴びるように顔を洗いタオルでごしごしと水気をふき取る。

洗面台に設置された鏡に映るのは見慣れない少年ともいえそうな青年の顔。

手を伸ばせばその青年も手を伸ばす。

わかつてはいたけれど、やはり今の自分の顔らしい。  
男にしか見えないが、それでもやっぱり自分の顔だと思える程度に  
元の顔に似ているのだから不思議だ。

てつきり今までと大差のない程度の女顔だろうと思っていたのだが、  
予想と違ってしつかり男の顔だった。

この顔で昨日のあの醜態をやらかしてしまったのかとため息をつく。  
鏡に映る自分はどう見ても男で。成長途中の青年でしかなかった。  
思ったより銀髪に違和感が少なかったのが唯一の救いだろうか。

朝ごはんはパンとスープという簡単なものだったが、噂に聞くよう  
な（主にオタクの友人情報）固いパンというわけでもなく、食べや  
すいものだった。

むしろしつかりと素材の味が生かされていておいしかった。  
しかし旅となれば日持ちのする固いパンになるのだろうけれど。

お腹いっぱい食べて、ご馳走様と顔をあげれば心配そうにこちらを  
見つめるシャムス。

それが何故だかわからずに首を傾げれば、やはり心配そうな声で問  
う。

「それだけで足りるのか？やはりまだ具合が悪いんじゃない？」

「え？いつもより多く食べたぐらいだけど」

食べる量が少ないと心配されたいが、実際いつもより多く食べ  
たと思う。

シャムスは納得のいかないような顔だったが、とりあえずそれ以上  
追求されることはなかった。

しかし実際調子はよいので、元気だよとアピールしてみたら視線を逸らされた。シヨック。

朝食を終え、少ない荷物をまとめ宿を出た。

制服は目立つし邪魔になるのでさくつと処分した。

元の世界に戻れたとしても男物なので使えないし。

+ - + - + - + - + - + - + - + - + - +  
+ - + - + - + - + - + - + - + - + - +

買い物は楽しい。

売っているものはあちらの世界とかなり違うけれど、色々なものを見ているだけで充実感で満たされる。

物珍しそうにキョロキョロしていると、店のおばちゃんやお姉さんたちが声をかけてくる。

「お兄さんどうだい、これなんてウマイよ！サービスするから見ていきなよ」

「おにーさん、オマケするから買っていないかい？」

サービスとかオマケという言葉には弱く、そちらのほづにふらふらと近寄っていくとシャムスに腕を掴まれ連行されてしまった。

あのお菓子初めて見たけれどおいしそうだったな、と後ろ髪を引かれながらもシャムスに腕を引かれ先を急いだ。

目的の店につくと、シャムスが店員となにやら話し出したので店内

見て歩くことにした。  
店内にあるのは旅服といわれる旅をする為の服で、着飾るための服は皆無だった。  
そのことは少し残念だったけれど、私にとっては旅服も新鮮で面白い。  
手にとって見れば不思議と軽くて丈夫そうな布で出来ていて、さらに興味をそそられる。

「ラピス」

シャムスに呼び止められてそちらにいけば、店員が私のサイズを測り数着の服を取り出した。  
その服を確認してシャムスが頷き、そのうちの二着をこちらに渡す。

「これに着替えてくれ」

「ん、わかった」

店員に案内され、店の奥にあったスペースで着替える。  
やはり軽いその服は、少しかちつとしたデザインなのに体にしっくりと馴染み動きやすい。  
今まで借りていたシャムスの服をお礼をいって返すと、シャムスは満足そうに笑う。

「服、ありがとう」

「ああ、サイズは大丈夫なようだな。それじゃあこれとこれを」

シャムスが他の二着を指し、支払いを済ませる。  
そして今更ながらに気づく。

私この世界のお金なんて持っていない、と。

「シヤムス、お金は・・・」

「アルから預かっているから問題ない。さあ、もついくぞ」

そして再び手を引かれながら店を後にする。

無事亡命できたなら仕事を見つけてお金を返さなくちゃと頭の片隅で考えながら。

街を出る前に昼食用にサンドイッチを買った。

その店の隣は先ほど私に声をかけてきたお姉さんの店で、カラフルなお菓子が並んでいる。

ちよつと奇抜な色のものもあつたがどれもとてもおいしそうだ。

「まったく・・・」

背後でシヤムスがため息をつく。

そして私をひよいと押しのけて、シヤムスはお姉さんに声をかけた。

「オススメは？」

「え、そうですね。これなんていかがでしょうか？甘くて疲れた時にオススメですよ」

突然シヤムスに話しかけられたお姉さんは頬を染め、少し声が上ずっている。

オススメだというそれは、可愛らしい花のシロップ漬のようだ。それにしても色気が駄々漏れだよ、シヤムス。

「ではそれをもたらおう」

「ありがとうございます」

可愛らしくラッピングされたお菓子を受け取り、シヤムスはそのお菓子を私へと差し出す。

「ありがとうございます、シヤムス！」

「さあ、早く街をでるぞ」

「うん」

差し出されたお菓子を受け取り、ほくほくとした私の足取りも軽い。ついでらしく頬が緩んでしまう。そんな私を見るシヤムスが再びため息をついていたけれど、これはどうしようもない。

甘いものは乙女の心の栄養なのだ。

・・・今は男だけねど。



## 光の神と月の女神

お菓子に浮かれていた私は、その後旅の大変さというものを思い知った。

真新しいブーツは足に合ってはいたが、長く歩き続けたために靴ずれができ足が痛む。

そうでなくても長く歩き続けた足はパンパンで鉛の棒のように重い。暖かく春のような陽気だが夜は冷え、毛布に包まれても疲れとなれない野宿のこともあってあまり眠れない。

幸いなことに男の体のおかげか、それでもなんとか歩けている。

馬車でなら一日で着く距離を歩き始めて三日目。

本来ならもう次の街に着けているのだろうが、私のせいで今日も到着できなかつた。

シャムスは私の足の状態をわかつているのだろう、急がなくてはいけないはずなのに急かしはしない。

だからといって負ぶったりと私を甘やかすことはない。

これぐらいで音を上げていてはこの先アルデバランには到底たどり着けない。ただ必死に足を進めていた。

野宿の為にシャムスが木の枝を集め、手を翳すだけであつという間に火が付く。

これも魔法。でも加護とは違うものなのだという。

手伝うことも、手伝えることもない私は隣で膝を抱えて座っているだけだ。

「ごめん、シャムス。私のせいで」

「何を謝ることがある？ラピスは十分頑張っているだろう」

「でもっ・・・！」

「いいから足をだせ」

このやり取りもすでに恒例になってきている。

しぶしぶ靴を脱いだ私の足にシャムスがすりつぶした薬草を塗る。

薬草を塗られた場所がじんわりと暖かくなり、痛みがすこし和らぐ。

魔法で痛みをとったり傷を治したり出来ないのかと尋ねたら、シャムスはその魔法の適正が低くて実用的とはいえないものらしい。

リヒトの加護で癒しの魔法がつかえるらしいので、私も少し覚えてみたらどうだとも言われた。

加護があっても適正があるので、どの程度使えるようになるかはわからないらしい。

ゲームのように・・・例えば神官ならLVを上げれば誰でも回復魔法が使えるようになるというものではないようだ。

「明日にはルトの街に着く。一日そこで情報収集がてら休息をとろう」

「ん。了解」

少し楽になったところで横になる。

シャムスも木に背を預け、剣を傍らに置き目を閉じる。

さすがにこの世界に来てから四日目。

ずっと一緒にいたのでさすがに慣れてきたとはいえ、シャムスが美人さんであることに変わりはなく。

目が覚めた時など、不用意に視界に入れると心臓に悪い。

人目に付きにくいように進む森の中で、木々の間からすっかり細くなつた月が見えた。

モンドが言っていた朔まであと三日。

そういえばあれ以来モンドからの連絡(?)はない。

その影響か、モンドの加護で使えそうな魔法がないかと考えたのだが魔法が思い浮かばなかった。

落ち着いたら色々自分で調べてみるべきだろう。

色々と適正が高いはずなのに実際はまだ男になる魔法しか使っていないなんてもつたいなさすぎる。

モンドの加護についてしつかり理解し、この魔法が高等どころか失われた秘術とまで言われるものだったと知るのもうしばらく後の事。

+ - + - + - + - + - + - + - + - + - + - + - + - +  
+ - + - + - + - + - + - + - + - + - + - + - + - +

ふらつく足取りでルトの街に着いたのは次の日の太陽が真上に昇つた頃になってからだった。

宿に入り、上着と外套を脱ぎぼふんと音を立ててベッドに倒れこむ。たかが数日のことだがこのベッドの感触が懐かしい。

「ラピスは夕飯までここで休んでいてくれ。俺はちょっと街で情報

収集と買い物に行ってくる」

「ふぁーい」

荷物を降ろすとシヤムスは外套だけ外して告げた。

すでに睡魔に襲われてウトウトしていた私は枕に顔を埋めながら返事をする。

「ゆっくり休め」

優しい声とはたと扉が閉じる音が遠くで聞こえた。

気がつくとも目の前にはシヤムスと同じ柔らかかそうなやはり美形の金髪の男性とその傍らに幼い女の子が立っていた。するとトタトタと女の子が私に駆け寄り抱きつく。

「どうしてもあいたくて、おねがいたの。あなたのところへつれていって、って」

幼いけれど、将来は間違いなく美人さんになると断言できる。

とてもきめ細かい白い肌に流れるような銀髪。

モンドの面影がみえるこの子はモンドの隠し子だろうか。

「これはモンド本人だ。力が弱まると……つまり朔が近づくとこのように幼い姿になってしまう」

こちらの考えたことがわかるのか、男性が少女をべりっと私から引き剥がし教えてくれた。

へええ、と感心してモンドを見る。

上目遣いでこちらを見つめるモンドはそれはとても可愛い。

「あぶないの！きけんがちかづいてるの！」

その可愛い顔が苦しそうに歪められる。その瞳には涙が浮かんでいる。

それを見ると、私も苦しくなってしまう。

ポンポン、と男性がモンドを落ち着かせるようにその頭を叩いた。

「大丈夫、彼女には私の加護もあるのだから。ただ私たちが直接出来ることは限られている。力の使い方を知って、自身でも気をつけて欲しい」

「はい……」

男性はにっこりと微笑み、モンドを抱き上げた。

私が返事をするとう男性は満足そうに微笑み、二人から光が溢れ出す。

……この人がリヒト。私をここへ呼んだ存在。  
次第に強くなる光に目を細める。

「もっつ！ルリになにかあったらリヒトのこときらいになるからねっ！」

「大丈夫だ。モンドが悲しむようなことがないよう俺が障害をすべて消し去ってやろう。国ごとでもな」

溢れる光が強くなりぎゅっと目を閉じる。

光が収まり目を開けると、そこは見覚えのある宿の部屋だった。

思ったより長く眠っていたらしく、窓からは夕日が差し込んでいる。

体には倦怠感が残る。それは間違いなく・・・

「あのバカップル神・・・」

モンドが幼児化しているのには驚いたが仕方のないことのようにだし本人にもどうしようもないことなのだろう。

そんな状態で注意するように警告しにきてくれたのだろうからありがたいと思う。

それよりもリヒトの去り際のあの言葉。

モンドへの溺愛ぶりが伺えるその言葉を思い返すとなんともいえないう疲労感に襲われるのだった。

## 光の神と月の女神（後書き）

月の設定については現実とは違う点が多々あります。異世界ということとその辺はスルーしてくださいませ。

ちなみに朔以外は月は何かしらその姿が見える、という感じですが、新月も朔のあとの初めて月の見える夜、という本来の意味に近い形で使っています。

天候などの都合を除いて、月がない夜は朔だけという設定です。

## 美人さんと酒場

モンドが夢にあわられた。

危険を伝えるために、力が弱まっている時なのでリヒトの力を借りて。

危険だだけ伝えてイチャついて消えた二人の神。

危険を知らせてくれたのはいいんだけど、具体的には何が危険なのかさっぱりわからない。

どうせならもっと詳しく教えてくれてもよかったんじゃないだろうか。

どう危険なのかがわかれば対処も違ってくるのだから。

結局本当に自身で気をつける以外にはほぼ出来ることはない。

否。

即座にその考えを否定する。

モンドの加護によって使える魔法がある。ほぼ使ったことはないけれど。

では魔法がほぼ使えないであろう朔の時は？

剣など扱ったこともなく、いくら男の腕力があるとはいえ身を守るには心許ない。

それに疲れが出ているのか当初ほど力が入らないのだ。

リヒトの加護はどうだろう。

モンドのように魔法の使い方が頭に浮かんだりはしないが、加護はあるのだから魔法は扱えるかもしれない。勇者といわれるぐらいな



のだから扱えると思っててもよいんじゃないだろうか。  
厚い加護の特徴として現れている銀髪でモンドの加護ばかりに目が  
いつていてすっかり失念していた。

ではどうすればその魔法が学べるのか。

モンドの加護による魔法はズルをしたような形で習得してしまった  
ので普通はどうやって習得するのかがわからない。ゲームのように  
LVアップで自然と使えるようになるわけもない。

「シヤムスに聞いてみよ・・・」

考えることを放棄した私はベッドにダイブするように倒れこむ。  
ぼすんとすこし固めのスプリングに体が沈む。  
再び倦怠感に襲われて、目を閉じた。

「ん・・・」

ゆさゆさと揺り起こされ目が覚めた。

目を開ければベッドの傍らに座るシヤムスと目が合う。

「そろそろ夕飯の時間だが・・・大丈夫か？」

「あー、そういえばお腹すいたかも」

「なら近くの酒場にいこう」

ベッドから降り、外套を羽織る。

ふと傍らに置かれた鏡に目が留まる。そこに映るのは銀髪の青年。

「これ・・・目立つよね」

外套のフードを目深に被ってみる。  
ちよつと不自然ではあるけれど銀髪は見えなくなる。

「下手に隠そうとしても余計に目立つだけだ。堂々としているほうが案外めだたないものだ」

「そうなのかな・・・」

「気になるようならこれを使うといい」

そうさしだされたのは帽子。

キャスケットのような形だが大ぶりなそれは、被れば前髪以外がすっぽりと隠れる。

鏡を覗き込む口元に笑みがこぼれる。なかなか可愛いデザインで我ながらよく似合っている。

男なので可愛いといのもどうかと思うがフードを被るほど不自然さは感じられない。

「どうだ？」

「こっちのほうか断然いい」

「ならそれはラピスにプレゼントしよう。俺のお古で悪いが、な」

「うっん、ありがとうシャムス」

酒場への道のりの間、私はずっとご機嫌だった。

そして重要なことをすっかり忘れていたのだ。

周りの視線が痛い。

特に冒険者とおぼしき女性の視線が痛すぎる。

そう、私たちは酒場でとんでもなく目立っていた。

シヤムスはそれを気にする素振りなど見せず堂々としているが、それが余計に人目を引いている。

目立つのは私の銀髪だけじゃなくて、それ以上にシヤムスという存在が目立っていた。

とにかくシヤムスは美形すぎる。

その柔らかそうな髪はちみつき色というべき金の髪も、少しきつめのすみれ色の瞳も。

無駄な肉などまったく付いていなさそうなすらりとしたその体も。すべてが人を惹きつけてやまない。

そんな人物と一緒にいる私にもちらちらと好奇の視線が向けられる。店内は少し薄暗く帽子のおかげで銀髪だということはわかり辛いが如何せん注目を集めすぎている。

ここまで目立ってしまったと逆に色々と気にすることが馬鹿馬鹿しくなってくる。

小さく溜息をついて、人目を気にするのをやめた。

酒場の料理はとても美味しくてついつい食べ過ぎてしまう。

お腹が満たされると私たちはさっさと酒場を後にした。

・・・出るところがでて引っ込むところが引っ込んでいるおねーさん

が声をかけてきたから。

ちよつとつらやましくてチラチラと何度も盗み見てしまったのだが、おねーさんと目が合ってしまったってなんだか居たたまれなかった。

外はすっかり暗くなっていて空には星が煌いていた。

その空の中心にはすっかり細くなってしまった月。

ぷるり、と身震いする。

「朔まであと三日・・・」

ぽつり、無意識に言葉が零れ落ちていた。

## 魔法の概念と大人の階段

そもそも魔法とは。

大きく分けて二つの種類に分けられる。

一つは神の加護を受けたものだけが使える神聖魔法。

もう一つは魔力のある人間ならばだれでも扱うことの出来る精霊魔法。

加護を受ける人間は少なく、加護の特徴が外見に表れるほど厚い加護を受ける人はかなり貴重な存在だという。つまりその使い手は少ない。

一方精霊魔法は精霊の力を借り、その代償としてそれに見合う魔力を精霊に渡すというもの。

こちらは精霊との相性と内に秘める魔力の量によって使える魔法が変わってくるが、相性が悪くても簡単な魔法であればその力を発現することができる。私がイメージしていた魔法に近いのは精霊魔法だろう。

細かく説明しだすとキリがないと、シャムスが要約して教えてくれたこの世界の魔法の定義。

魔力というのははつきりとわからないけど、ただ間違いなく体の中にあると感じる暖かい何かの事だろう。

神聖魔法も魔力を必要とするが同じような効果でも必要とする魔力がかなり違うらしい。

例えば精霊魔法でコップ一杯の水を出すのに必要な魔力で、神聖魔法ではバケツ一杯以上の水が出せるとか。神聖魔法の事を世間では奇跡と呼ぶのもそこが関係しているらしい。

精霊にどの程度愛されているかやどの程度の加護を受けているかで消費する魔力は変わってくるが、神聖魔法のほうが必要とする魔力が少ないのは周知の事実だそうだ。

そして一番知りたかった魔法の学び方。

神聖魔法は扱える人間が少なく、加護を受けている神を信仰する神殿に保護されそこで魔法を学ぶのが普通らしい。私のようなケースは稀どころか初耳だとか。

精霊魔法は学校で学ぶ事が多いらしいが、それ以外にも書物で独学という手もあるらしい。

「つまり神聖魔法は使える人間が少なくてさらには神ごとに加護で起こせる奇跡が違う。だから教えられる人間に限られている、か」

「ああ。ちなみにアルメイサンであればリヒトの信仰が盛んでリヒトの加護を受けた人間が他国よりも多い。アルデバランではゾンネとモンドの二神の信仰が盛んでその加護を受けた人間も他国より多い。だからといって他国に加護を受けた人間がいなわけでもないが」

「ゾンネ？」

初めて聞く名前の神様だけど、リヒトが『光』でモンドが『月』とくれば・・・次に思い浮かぶものは。

「太陽・・・？」

「ああ。モンドの兄にあたる神だと言われているな」

「へええ・・・」

あのモンドの兄・・・アルデバランの神殿に行けば姿絵とかあったりするのだろうか。ちよつと見てみたい。ちよつと思考が脱線してしまっただけで、リヒトの加護は神殿にいないと魔法が使えないようなので精霊魔法を書物で独学で学ぶ、というのが無難なところだろう。

「魔法を覚えたいのか？」

「リヒトは神殿で学ぶ時間がないからだめだろうけど、精霊魔法なら本があれば独学でも学べるっていうし」

「独学は大変だが・・・街を出る前に本を買いに行くか」

「うん！」

これでなんとかなるかもしれない。楽観にすぎないけれど何もやらないよりはずっといい。心配事が少しだけ軽くなったからか、少しの空腹感と眠気に襲われる。

さっきご飯食べたばかりだよ、自分。

くああと欠伸し、ぼすんと音を立ててベッドに転がる。

お昼からずっと寝ていたのにまだまだ眠い。この状態はまさに・・・

「食っちゃ寝・・・」

いくらこの世界の知識がないとはいえシャムスにまかせっきりなのに自分はこの状態。

自分のダメ人間さに悲しくなったが睡魔には勝てず。

寝てしまえば空腹感もごまかせるかな、なんて考えながら眠ってしまった。

「ラピス」

「んー・・・？」

呼ばれて見上げればそこには濡れた髪をタオルで無造作に拭きながらこちらを覗き込むシャムス。

しつとりと濡れた髪にほのかに体から立ち上がる湯気。

まさに湯上り美人。

「湯上り美人・・・？」

一気に覚醒する意識。湯上り美人、つまりその意味するところは・

「・・・は？」

シャムスが怪訝な声を上げる。しまった、思わず口に出していたようだ。

ともかく確信を持ってシャムスに尋ねる。

「ここ、お風呂がある？」

「湯船という意味であればある、だな。順番制で使うことができる。今は俺達の順番だから起きたのなら入ってくるといい」

「もちろん・・・！」



急いで着替えとタオルを掴んで部屋を出る。  
場所はシャムスに教えてもらったので問題ない。  
そもそも大して大きくない宿なのですぐに見つかるだろう。

扉を開けると小ぢんまりとした脱衣所、その奥に風呂場へと続くガラス扉があった。  
期待をこめてガラス扉を開く。

やはり小ぢんまりとしたその室内には小さいながらも浴槽があった。

「お風呂っ!」

やはり現代日本人なのでお風呂のない生活は辛い。

水浴びなどは出来るので汗を流すことはできるがやはりお風呂に入れないのは辛かった。

ぱっぱと服を脱ぎ捨て、しかしかけ湯は忘れずに風呂へと浸かる。

「ああ幸せ・・・」

極力下半身は見ないように気をつけながら。

一度はうつかり目にしてしまったがやはり心は乙女。色々とキツイ。

しっかりと温まっていたの湯船から上がり、体を洗おうとスポンジに石鹸をつけたつぷりと泡立てる。

そしてそこで気づいた。

触らなければ洗えない。

結論から言えば、出来るだけ触れないように顔を背けながら洗った。

でもまったく触らずに洗えるわけもなく。

天国の家族のみんな、私は今日大人の階段をまた一段上がってしまいました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2764ba/>

---

銀の勇者と金の王

2012年1月13日23時53分発行